

成人期女性における資源配分と生活感情⁽¹⁾

—高学歴化は成人期女性の人格発達をどう変えるか—

永久 ひさ子・柏木 恵子*

Abstract

This study focuses on the relationship between life-feelings and resource distribution in middle-aged women, focusing on levels of education. From the results obtained, it can be concluded that the sense of achievement and satisfaction with their existence, as individuals, was higher among women with higher levels of education than among those with lower one. In subjects with lower levels of education, child-rearing was not only a part of the general role of caretaker of the family, but it played a pivotal role in exhibiting one's personal strengths and personality. In higher-educated subjects, such objects of personality development and growth were separate from their roles as a mother. This result may indicate that level of education has effects on middle aged women's sense of individual existence.

Key Words : Higher education, Life-Feelings, Middle-aged women, Personality development, Resource distribution

女性にとって子育てとは、家族の世話であると同時に、楽しみ、喜びでもある。子どものために与えるものも多いが、そこから得るものも大きい。ではなぜ少子化なのだろう。それは、自分と家族役割の関係の捉え方が変化し、自己の存在への満足を何に感じるかが変わってきた

Life-Feelings and Resource Distribution among Middle-aged Women

—Effects of Higher Education on Personality Development—

* Hisako Nagahisa • Keiko Kashiwagi

(1)本研究は平成11年~13年度 科学研究費(課題番号11610138)の補助を受けて行った。

Correspondence Address : Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University,
196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-Gun, Saitama 356-8533,
Japan.

Accepted October 8, 2002.

Published December 20, 2002.

ことによるのではなからうか。

成人期女性の人格発達研究は、個としての発達と関係性の発達の2つの側面から捉える必要性が指摘されている（例えば、堀内 1993, 前川・無藤ら 1996, 岡本 1996・1997・1999, 中釜・園 1989など）。それは、青年期に職業を選び、成人期を通して職業生活をアイデンティティの軸として生きるのが一般的な男性と異なり、女性の成人期には出産という女性特有のライフイベントがあることによる。そのことにより、女性は成人期に個としての発達と関係性の発達の葛藤を経験することになる。

個人の持つ時間や心理的エネルギーは個人差があっても有限である。つまり、職業のみに全力投球するならば出産・子育てなど家庭役割の側面に配分する資源が不足し、家庭役割に多くの資源を配分すれば、個人としての生き方へはわずかしか配分できない。自分にとって重要な領域に十分な資源を配分できることは、その対象となる領域を充実させ満足感につながる。反対に、重要な領域に十分な資源が配分できないことは、焦りや不満を感じさせることにならう。成人期女性が経験する個と関係性の発達の葛藤とは、この資源配分をめぐる葛藤といえるのではなからうか。

女性の人格発達の中で、個の側面と関係性の側面のどちらがよりクローズアップされるかは、その女性がどのような社会・文化の中で生きているかと関連する（柏木 1999）。

戦後の産業構造の変化は、女性の職業選択肢を拡大した。そのことは、女性が母親以外の生き方を持つこと、家庭役割の外で能力を発揮する場を得ることを可能にした。また近年の少子・長寿命化という人口革命は、女性の生涯に占める母親である期間を縮小した。このことは家電製品の普及や家事の外部化とあいまって、女性が家事・子育て以外のことをする時間的ゆとりを生み出した（NHK放送文化研究所 2002）。その結果、かつて家事・子育てだけで手一杯だった時代には関心を向けられることがなかった、余った時間や心理的エネルギーを向ける対象としての「自分」がクローズアップするようになった。

また家電製品の普及と家事の外部化は、家事を、技術や経験を必要とする仕事から、誰がやっても同じようにできる仕事に変えた。その結果、かつてはそこに自己の存在意義を見出せた家庭役割が、それだけでは自分の能力が発揮しきれないものになった。そして、家事に代わって能力を発揮できる仕事や活動の場を、家庭役割以外に求める必要が出てきたのである。

一方で、自分と家族の関係も変化している。かつては、「内助の功」と呼ばれたように、妻が陰で家族の成功を支えることは妻自身の成功であり満足につながった。それは、家庭役割の他に自身の能力を発揮する場がないことに加え、家族と自分を一体と考えればこそその満足であらう。

しかし今日、これらの事情は大きく変化している。自分自身を家族と一体と捉えるか、家族とは独立の個人と捉えるかを問う調査では、若い世代ほど一体と捉える傾向が弱まっていた。また、経済的一体感は高学歴群で低いことが明らかになった（永久・柏木 2000）。

また、この自分と家族を一体と捉えるか否かの家族観は、子どもの価値の変化と関連してい

た。子どもの価値のうち、「子どもがいると老後安心」などの情緒的価値や「子育てで自分が成長する」などの自分のための価値は、総じて平均値が高いものの、自分を家族とは独立の個人と捉える群、つまり高学歴群で低くなっていた（柏木・永久 1999, 永久・柏木 前出）。

このことは、先の社会・文化的状況の変化に加え、女性の高学歴化が女性の心理を変化させることを窺わせる。つまり、高学歴化により自己の能力や専門性への自負が強まることで、自分は家族とは独立の個人との認識を強め、自身の能力を発揮する対象を強く求めるようになる と推測される。女性の高学歴化は、自己の存在への満足を、家庭役割以外の個人としての能力を発揮する生き方から得ようとする傾向をより強めるのではなかろうか。

自己のあり方だけでなく、対人的側面などを含めた包括的な満足感を測定するものに生活感情がある。生活感情は対人関係の領域と自己認知の領域を含めた評価的感情から構成され、生活空間や自我同一性と関連することが、青年を対象とした研究から報告されている（宮下・小林 1981, 諸井 1984, 落合 1985, 大野 1984, 内田 1990）。これら自己認知に関する領域を既婚女性の生活空間を考慮に入れて修正・追加し、さらに既婚女性において重要な領域である家族との関係性を問う項目を加えたものが既婚女性の生活感情尺度である。この既婚女性の生活感情の調査では、大卒有職群に比べ大卒無職群で生き方への否定感情が高いことが報告されている（永久 1995）。この生き方への否定感情とは、将来目標や自身のあり方、過去の生き方への否定的評価的感情である。これらが無職群で高いことから、今日の大卒女性においては、家族役割のみでは自身の存在への満足感が低くなるのが推測されよう。

本研究ではまず、成人期の人格発達を個人としての発達と関係性の発達の2側面から既婚女性の生活感情を測定する尺度を作成する。既婚女性の生活感情尺度（永久 前出）の内容を一部修正し、誰を指すかが曖昧な「家族以外の人のサポートへの感情」の項目を除き、過去一現在一将来の時間的展望についての感情を加えた。そして、その生活感情尺度と資源配分との関連から、家族と自身へのどのような資源配分が、どのような側面の人格発達を促進するのかを検討する。またそこにみられる学歴差から、高学歴化が女性の発達の様相をどのように変えていくかを考察する。

【方 法】

（調査対象者） 都内の大学に通う子どもを持つ既婚女性248名

（調査手続き） 調査時期は2000年5月である。無記名の質問紙法による調査を行った。調査票は学生を介して母親に配布し、回収は個別に郵送で回収した。有効回答率は52%だった。大学生を持つ母親を対象とした理由は次のことに拠る。子どもが大学生になると母親としての道具的役割はほぼ終了する。この時点まで母親役割を生き方の中心にしてきた女性でも、その後約30年ほど続く人生を生きるために、母親役割以外の生き方への関心を強めると予測されるか

らである。

（調査内容） 調査内容は以下の通りである。①資源配分に関する19項目。時間資源や心理的エネルギー資源を、どの程度家族との関係性のために配分しているか、個としての自分のために配分しているかを、実際の行動について問う項目である。全くやっていない（1点）からかなりやっている（4点）までの4件法で回答を求めた。②生活感情を問う38項目。生活感情とは、日常生活で経験する比較的長期間持続する感情で、肯定感情と否定感情の評価的感情である。永久（前出）では、生き方への肯定感情と否定感情、夫への感情、子どもへの感情、家族以外の人のサポートへの感情、日常生活への感情の6因子が抽出された。本研究では、家族と個としての自分との関係に焦点を当てるため、この結果を参考に、生き方への肯定感情及び否定感情、夫への感情、子どもへの感情について一部項目を修正・追加し作成した。生き方への感情は、過去・現在・未来という時間の流れの中での同一性の感覚に関する項目、自分の生き方、存在意義に関する項目、個人としての生き方の有無などの項目から構成されている。当てはまらない（1点）から当てはまる（4点）までの4件法で回答を求めた。③フェイスシート：年齢、子ども数、学歴、就業状況を尋ねた。

【結果と考察】

1 調査協力者の特徴

調査協力者の特徴は Table 1 の通りである。平均年齢は47.8歳、学歴は、高卒・短大卒・大卒がほぼ3割ずつで、やや低学歴が多いものの学歴の偏りはあまりない。職歴はこれまでずっとフルタイム有職の者が16%、それに対して無職の者が32%と多い。なお、現在パートタイ

Table 1 調査協力者の特徴

学 歴	職 歴						合 計
	有 職	無 職	パート	退職後 再就職	在 宅	その他	
高校	7	12	12	5	2	12	50 39%
短大	6	12	10	3	1	11	43 34%
大学	7	17	2	1	3	4	34 27%
子ども数							
1人	4	4	2	1	3	1	15 12%
2人	11	25	12	7	2	16	73 57%
3人	4	9	10	1	1	8	33 26%
4人以上	1	3	0	0	0	2	6 5%
合計	20	41	24	9	6	27	127
	16%	32%	19%	7%	5%	21%	100%

ムで働く女性が多いが、その報酬・労働時間は一様ではない。そのため本研究では、フルタイムの職業に就く人のみを有職群とした。また、これまで職業に就いた経験のない人と結婚・出産退職以降働いていない人を無職とした。

子ども数は、子ども数2人及び3人が83%を占める。子ども数が満足感や資源配分と関連することは予想されるが、子ども数2人及び3人に集中しているため、本研究では子ども数との関連についての分析は行わなかった。

2 資源配分

(1) 資源配分の構造

まず、母親が自分の持つ時間資源や心理的エネルギー資源を、どのようなことに配分しているかをみていこう。既婚有子女性の資源配分の構造を検討し、分析の軸を得るため、日常の活動について質問した15項目について主成分分析及び varimax 回転を行った (Table 2)。因子負荷量4.0以下の項目及び、他の因子に3.0以上の負荷がある項目を除外し、再度因子分析を行った。この過程で、「子どもの教育をする」「よい母親であろうとする」など子育てに関する項目及び「家の外で仕事をする」は、両因子に負荷が高かったため除外した。また、「家族以外の人の世話をする」など家族以外のための資源配分は因子としてまとまらなかったため除外した。

Table 2 資源配分に関する因子分析 (varimax 回転後)

	F1	F2	平均値
個性や能力を活かした活動をする	.854	-.018	2.29(.98)
自分の目標のための準備をする	.770	-.018	2.54(.96)
趣味・習い事・スポーツをする	.671	.014	2.49(.99)
自分の意見や考えを表現する	.666	.098	2.83(.65)
$\alpha = .73$			
夫の身の回りの世話をする	-.137	.814	3.09(.78)
夫の期待に応える	.200	.695	2.89(.78)
夫の話をきく	-.010	.680	3.30(.69)
親からの期待に応える	.200	.563	2.88(.67)
子どもの身の回りの世話をする	-.094	.523	3.20(.76)
$\alpha = .68$			
二乗和	2.410	2.125	累積寄与率
寄与率(%)	26.78	23.61	50.38
因子抽出法: 主成分分析			

その結果、固有値2.0以上の2因子が得られた。第1因子に負荷量の高い項目は「個性や能力を活かした活動をする」「自分の目標のための準備をする」など、自分自身の満足のための資

源配分であることから、[自身への配分]と命名した。第2因子に負荷量の高い項目は「夫の身の回りの世話をする」「夫の話聞く」「子どもの身の回りの世話をする」など、夫・子どもの身の回りの道具的世話や情緒的世話など家族との関係性の構築・維持のための資源配分であることから、[家族に配分]と命名した。信頼性を検討するため、Cronbachの α 係数を算出したところ、第1因子が $\alpha = .73$ 、第2因子が $\alpha = .68$ だった。分析にあたっては、各次元それぞれの項目の得点を足し合わせた後項目数で割ったものを、資源配分下位尺度得点とした。

家族の世話は女性としての能力や特性が活かされる仕事であるとの思いや、家族の情緒的なケアに力を注ぎ家族の関係性を構築することは母親自身の目標でもあるはずとの思いは、男性ばかりでなく女性の中にもある（例えば、朝日新聞、1998年11月25日「専業主婦の憂うつ」、11月26日 同反論特集；読売新聞、2001年2月16日、「変わる家族像・結婚観」など）。しかし資源配分が、家族への配分と自身への配分の2因子であったことは、既婚女性が資源配分の対象を2つの面から捉え、自分自身のための資源配分を家族の一員としての資源配分とは別と認識しているといえよう。

しかし子どもの教育についてはこれとは異なる。因子分析の過程で、「子どもの教育をする」「いい母親であろうとする」は両因子にわたって高い負荷があったため、どちらに入れることも曖昧になると判断し除外した。このことは、母親にとって子どもの教育が、家族の世話としての資源配分の側面と、自分の生きがいや満足のための資源配分の両側面を持つことを示唆している。

また、「家の外で仕事をする」も同様に両因子にまたがって高い負荷量を示したため除外した。仕事をする目的は自身の能力を活かすなど自己実現的目的だけでなく、家計費補助のためであるケースもある。「家の外で仕事をする」の意味は前者の場合には「自身への配分」であるが、後者の場合には「家族への配分」となる。このことは、母親が職業を持つことの意味が一樣ではなく、家計収入や学歴により異なることを示唆するものであろう。

(2) 資源配分の特徴

まず全体的な資源配分の傾向をみよう。[自身への配分]と[家族に配分]の平均値を対応のあるt検定により比較したところ、[家族に配分]の方が有意に高かった（平均値：[自身への配分] 2.54(.66)、[家族に配分] 3.07(.48)、 $p < .001$ ）。既婚女性は全般的に、自分自身よりも家族のために有意に多くの資源を配分しているといえよう。

本調査のサンプルは大学生の親で、母親としての道具的役割はほぼ終了した時期である。それにも拘らず、多くの既婚女性は資源を自身よりも家族へ優先して配分している。一方で、家族とは別の自分の世界を持つことは重要だ、など、既婚女性が家族役割ではない個人としての世界を求める態度は、世代、学歴、職業の有無に拘らず、全ての層で非常に高いことが報告されている（柏木・永久、永久・柏木 前出）。つまり、家族役割以外の自分を希求する価値観は既婚女性全般に非常に高いことが窺える。このことを考えるならば、既婚女性の資源配分に関する価値観と現実との間には、かなりのズレがあると予想される。このズレは、個人の生き方

への関心が高く自身への十分な資源配分が必要と感じつつも配分できないケースと、家族役割以外の個人としての生き方への関心が曖昧であるために、自身への資源配分が少ないケースであろう。前者の場合、自身への配分の少なさは、自身のあり方や生き方への満足感を低めると予想される。

資源配分について学歴差を検討したが、いずれにも有意差はみられなかった。学歴とジェンダー観の関連をみた調査では、高学歴の妻ほど現存のジェンダー役割に否定的であった（目黒・矢澤 2000）。このことを考えると、たとえ意識ではジェンダー役割に否定的であろうと、その意識は実際の資源配分には反映されにくいことが窺われる。

3 生活感情

(1) 生活感情の構造

次に生活感情について検討しよう。生活感情の構造を検討し分析の軸を得るため、生活感情35項目について主因子法による因子分析及びプロマックス回転を行った（Table 3）。先の手続きと同様の方法で、再度因子分析を行い、固有値1.0以上の4因子を得た。

各因子に負荷量の高い項目内容から因子名を命名した。第1因子は「夫と結婚してよかった」「夫といるのは楽しい」などの項目から成るため「夫への満足感」とした。第2因子は「今やっていることは将来役に立つ」「自分の存在は社会に意味あることと感じる」などであった。第3因子は「自分の人生はこのままでいいのかと不安になる」「本当にやりたいことができていない気がする」「打ち込めるものが見つからず焦る」などであった。このように、自己のあり方への認知は肯定的内容の第2因子と否定的内容の第3因子の2因子により説明されることになった。この点は、内田（前出）永久（前出）においても同様の結果がみられ、ともに「自己認知肯定得点」「自己認知否定得点」（内田 前出）、「生き方への肯定感情」「生き方への否定感情」（永久 前出）と、一つの内容についての肯定と否定、という意味合いの命名がなされている。しかし、本研究における第2因子はその内容から、自己のあり方や存在への満足感、すなわち自尊感情に近いものであるのに対し、第3因子は「本当にやりたいことができていない」「これまでの人生にやり残したことがある」「打ち込めるものが見つからず焦る」など、個人としての活動や生き方が焦点で、これらの中心にあるのは個人としての自分を発揮する対象の欠落感による生き方への焦りや迷いである。そこで、第2因子を「自己の存在満足感」第3因子を「個としての焦り迷い」と命名した。第4因子は「子どもは私の気持ちをわかっている」「子どもを心から信頼している」などであったため「親子関係満足感」とした。各因子の信頼性を検討するため、Cronbachの α 係数を算出したところ、第1因子 $\alpha = .90$ 、第2因子 $\alpha = .86$ 、第3因子 $\alpha = .83$ 、第4因子 $\alpha = .65$ で、十分な信頼性があるといえよう。この因子構造は、家族の関係性の次元と自己のあり方への認知の次元という当初の仮説に沿ったものであるため、これらの因子を採用した。分析にあたっては、各次元の項目の得点を足し合わせた後項目数で割ったものを、生活感情下位尺度得点とした。

Table 3 生活感情の項目と因子パターン行列（プロマックス回転後）

	F1	F2	F3	F4	平均値
夫と結婚してよかった	.861	-.028	-.082	-.030	3.04
夫はどんなときも私の味方だ	.812	-.110	.019	.001	2.79
夫といるのは楽しい	.806	-.035	.019	-.092	3.06
夫は私の人間的成長を喜んでくれる	.794	.179	.019	.045	2.72
夫とはお互いにわかりあっていると感じる	.777	-.023	.019	.107	2.74
$\alpha = .90$					
今やっていることは将来役立つ	.027	.761	.093	.102	3.02
自分の存在は社会に意味あることと感じる	-.094	.752	.020	.000	2.64
これまでやってきたことは現在の自分に役立っている	-.003	.725	.053	-.032	3.16
将来の具体的な目標があって楽しみだ	.143	.675	-.113	-.156	2.39
成長し人間的な魅力を増していると感じる	.006	.619	-.086	.050	2.49
最善を尽くして生きていると満足だ	.036	.596	-.084	-.083	2.97
自分らしい生き方をしていると満足だ	-.058	.576	-.041	.151	2.60
$\alpha = .86$					
自分の人生はこのままでいいのかと不安になる	.023	.078	.791	-.050	2.52
本当にやりたいことができていない気がする	.065	-.003	.714	-.102	2.71
これまでの人生にやり残したことがある	-.031	-.018	.696	.010	2.77
これまでの生き方を後悔することがある	-.094	-.055	.635	0.03	2.42
打ち込めるものが見つからず焦る	-.091	-.001	.560	.037	2.07
毎日が同じことの繰り返しのような気がする	.138	-.164	.483	.062	2.88
$\alpha = .83$					
子どもは私の気持ちをわかっている	.037	-.060	-.090	.717	2.90
子どもと一緒にいるのは楽しい	-.069	-.009	.001	.575	3.50
子どもを心から信頼している	.080	.116	.066	.543	3.45
$\alpha = .65$					
二乗和	5.54	3.42	2.16	1.51	累積寄与率
寄与率(%)	26.38	16.29	10.28	7.20	60.16

因子抽出法: 主因子法

生活感情がどのような構造であるかを4次元の内部相関によってみてみよう (Table 4)。[夫への満足感] は [親子関係満足] とは相関関係にあるが、[自己の存在満足感] [個としての焦り迷い] とは関連しない。[自己の存在満足感] は [親子関係満足感] と有意な相関関係にある。また [個としての焦り迷い] は [自己の存在満足感] と有意な負の相関関係にあった。

[夫への満足感] [親子関係満足感] はともに、家族の関係性への満足感である。しかし、生き方の満足感を支えるのは [親子関係満足感] のみであった。このことは、自己の存在への満足感に関わる関係性とは、家族関係のよさ自体というよりも、一生懸命に子育てをした結果良好な親子関係が得られたとの満足であることが窺われる。

このように既婚女性の [自己の存在満足感] を支える上で子どもの存在は大きいですが、その

みに支えられているのではない。[自己の存在満足感]とさらに強い関係にあるのは[個としての焦り迷い]である。つまり、成人期女性における自身の存在意義や成長は、個人としての生き方が充実しているか否かとより密接に関連しているのである。中年期の既婚女性にとって、子どもとの関係における自分の存在の重要性は今後弱まることはあっても強まることはない。自己の存在やあり方への満足感、子どもとの関係性よりも、将来、より比重が増すことが明らかで、個人としての生き方がどれほど充実しているかとより強く関係するのであろう。

Table 4 既婚女性における生活感情内部相関

	夫への満足感	親子関係満足感	自己の存在満足感	個としての焦り迷い
夫への満足感	—	.292**	.139	-.161
親子関係満足			.304**	-.091
自己の存在満足感				-.442***
個としての焦り迷い				—

p<.01 *p<.001

(2) 生活感情の特徴

次に生活感情について、サンプル全体の平均値をみてみよう。[親子関係満足] 3.23(.48), [夫への満足感] 2.88(.78) [自己の存在満足感] 2.69(.64), [個としての焦り迷い] 2.57(.66) の順に高かった。[親子関係満足] [夫への満足感] という家族の関係性への感情と比べると, [自己の存在満足感] [個としての焦り迷い] という自己のあり方への認知の得点はともに低い。

本調査のサンプルは、40代後半から50代で、常勤で働いた経験のない者が多い。前述のように若い世代ほど、また高学歴、有職者ほど自分を家族とは独立の個人と捉える傾向が強まることを考慮すると、本調査のサンプルは家族との情緒的・経済的一体感が強い傾向にあると考えられる。家族の関係性への感情に比べ自己のあり方への感情の得点が低いのは、本調査のサンプルが、自分は家族とは独立の個人であるとの認識が曖昧なため、自身の生き方への関心が低いためであろう。

では女性の高学歴化は、家族の関係性への感情や自己のあり方への認知をどのように変えているだろうか。生活感情を学歴別に比較した (Figure 1)。

その結果、[夫への満足感] [自己の存在満足感] に学歴差がみられ、いずれも高学歴群は低学歴群よりも有意に高かった。

[自己の存在満足感]が大卒群で有意に高いのは、高学歴になるに従い、能力や専門性への自負が強まること、また職業選択などでの選択肢が広がり、より自分に合った選択が可能になることによると思われる。

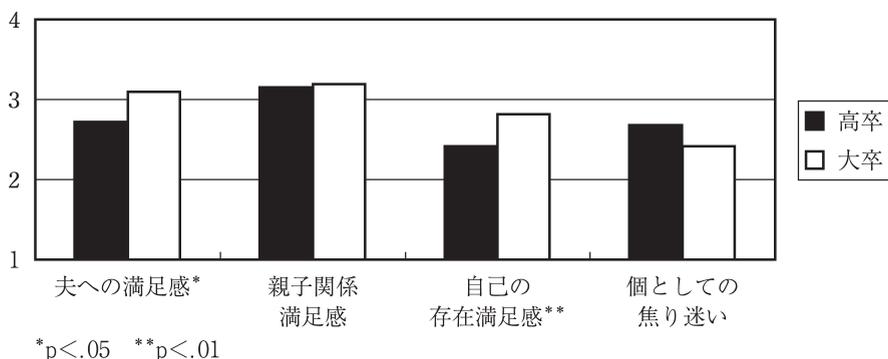


Figure 1 既婚女性における生活感情 学歴差

[夫への満足感] は妻の学歴とどのように関連するだろうか。一般に夫の学歴は妻の学歴とともに高くなる。父親の学歴としつけについての考えの調査では、高学歴の父親ほど、しつけは母親だけでなく夫婦である、と考える傾向が強かった (神原・高田 2000)。夫への満足感が親子関係満足感と関連していたことを考え合わせるならば、夫への満足感が高学歴群で高いのは、夫も子どものしつけに責任を持っていると感じることによるのではなかろうか。

4 資源配分と生活感情

(1) 資源配分と生活感情との関連

では、資源配分は既婚女性の生活感情とどのような関係にあるのだろうか。資源配分と生活感情の相関をみてみよう (Table 5)。

Table 5 資源配分と生活感情相関

	夫への満足感	親子関係満足感	自己の存在満足感	個としての焦り迷い
家族に配分	.329***	.213*	-.001	.027
自身への配分	.013	.250**	.671***	-.385***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

[家族に配分] は [夫への満足感] [親子関係満足感] とそれぞれ有意な正の相関関係にあった。また [自身への配分] は [親子関係満足感] [自己の存在満足感] と有意な正の相関関係に、[個としての焦り迷い] とは有意な負の相関関係にあった。

[家族に配分] が家族との関係性への満足感と関連することから、夫の世話や子育てに多くの時間や心理的エネルギーを使うことが家族の関係性への満足を高めることが示唆される。家族から期待される家庭役割をきちんと果たすことが、妻の側の家族への信頼感の認知など主観的的心理的絆を強め、家族との関係をより肯定的に感じさせるのであろう。しかし、[家族への

配分] は, [自己の存在への満足感] とは独立である。家族の世話は家族との関係性への満足感を高めるが, それだけでは自己のあり方についての満足は得られないことが窺われる。

[自身への配分] はどのような生活感情と関連するのだろうか。[自身への配分] が多いほど, [自己の存在満足感] は高く [個としての焦り迷い] は低くなる。妻・母としての満足ではない, 1人の個人としての満足のための資源配分が, 将来までつながる, 社会的に意味ある生き方であるとの満足感を高めるといえよう。また [自身への配分] が, [個としての焦り迷い] を低めるという結果は, 家族役割以外の自分への関心が強まる一方で, 現実にはそのような生き方が実現されていないゆえの焦りや迷いであることを示唆している。今日の成人期女性における自己のあり方への満足感, 妻・母ではない「自分」への十分な資源配分によって得られる部分が大きいといえよう。

[自身への配分] は [親子関係満足感] とともに正の相関関係にあった。このことは, 子育てが母親にとって, 家族役割としての資源配分であると同時に, 母親自身の個性や能力を活かすための資源配分とも認識されていることを示している。

ではこのような関係は, 女性に普遍的にみられる関係であろうか。近年の少子化は, これらが社会・文化的状況により変化するものであることを示唆している。次に, 学歴別に検討することで, 高学歴化による変化をみてみよう (Table 6)。

Table 6 学歴別 資源配分と生活感情の相関 (上段は高卒 下段は大卒)

	夫への満足感	親子関係満足感	自己の存在満足感	個としての焦り迷い
家族に配分	.386**	.324*	.121	-.007
	.229	.348*	-.047	.019
自身への配分	-.065	.346*	.698***	-.190
	.043	.025	.587***	-.495**

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

高卒群における [家族に配分] は [夫への満足感] [親子関係満足感] との間に有意な相関関係があった。[自身への配分] は [親子関係満足感] [自己の存在満足感] と有意な正の相関関係にあった。一方大卒群では, [家族に配分] は [親子関係満足感] と有意な相関関係にあった。また [自身への配分] は [自己の存在満足感] [焦り迷い] との間に有意な相関関係がみられた。

高卒群において, [親子関係満足感] は [家族への配分] とともに [自身への配分] とともに正の相関関係にある。このことは, 高卒群において子育てが, 家族の世話としての側面と, 母親自身の個性や能力を活かす対象, それを通して自身が成長するものとしての側面を持つことを示している。

一方、大卒群において「親子関係満足感」は、「家族に配分」とのみ関連があり「自身への配分」とは独立だった。このことは、大卒群において子育ては、家族の世話としての側面が大きく、母親自身の個性や能力を活かすための資源配分としての側面は小さいこと、換言すれば、大卒群の母親は自身の個性や能力を活かす対象を、子育て以外の個人の世界に求めていることを窺わせる。この解釈は、「自身への配分」が「自己の存在満足感」「個としての焦り迷い」と関連し「親子関係満足感」との関連がみられなかったことにも当てはまる。大卒群では、母親自身の個性や能力を活かす対象とは家族役割とは別の個人としての生き方であるとの認識が強いために、「親子関係満足感」との関連がみられず、「個としての焦り迷い」との関連がみられるのであろう。

大卒群において「家族に配分」は「夫への満足感」と関連していないことから、妻役割の遂行と夫との関係性とは関連しないことが示唆される。高学歴になるほど、夫婦関係における道具的役割の比重は減少し精神的結びつきの比重が増すことが示唆される。

以上のように自身への資源配分には学歴差はみられないものの、その対象は両群で異なることが示された。高卒群では、子育ても母親自身の個性や能力を活かす対象であるのに対し、大卒群では、子育てとは別の個人としての生き方がその対象であることが窺われた。先にみたように、「自己の存在満足感」は高学歴群で高かった。自分を家族とは独立の個人であると認識する個人化志向は高学歴群で強まること（永久・柏木 2000）と考え合わせるならば、高学歴化によって、家族役割とは別の個人としての自分についての認識や重要性が明確になり、そこに資源を配分することで、「自己の存在満足感」が高まることが推察される。

【総合的考察】

本研究では、成人期女性を対象に、資源配分（時間や心理的エネルギーなどの資源を家族と自身にどのように配分するか）と生活感情との関連について検討した。また女性の高学歴化が、人格発達のありようをどのように変えるかについて考察した。

生活感情は、夫への満足感、親子関係満足感、自己の存在満足感、個としての焦り迷いの4領域に分類された。資源配分は家族への配分と自分自身への配分とに分類された。子どもの教育は家族のための資源配分にも自分のための資源配分にも負荷が高く因子分析から除外した。このことから、子どもの教育には、世話である部分と、母親自身の満足のための部分とがあると推察される。

生活感情と資源配分の関連では、家族のために時間やエネルギーを配分することは、家族の信頼感や情緒的満足は高めるものの、今日の女性における自己のあり方への満足感にはつながらないことが示された。一方、自身への資源配分は自己の存在への満足感を高め、個人としての生き方への満足感を高めるだけでなく、親子関係満足感も高めていた。母親にとって子育て

は、家族の世話としての部分と、自分自身の楽しみや満足のための部分とがあることが示された。

しかしこのような生活感情と資源配分の関係には、学歴差がみられた。自身への資源配分が親子関係満足感を高めるのは低学歴のみであった。一方、自身への資源配分が少ないことで個人としての生き方への焦りや迷いが高まるのは高学歴群のみであった。つまり、低学歴群では子どもとの関係性の構築・維持のための資源配分も自身の満足のための配分と感じられるのに対し、高学歴群における自身の満足のための配分とは、親子関係満足感のためとは別の、個人としての生き方の充実のための配分と捉えられていることが窺われた。

以上のように高学歴の母親では、自身の存在への満足感は、子育てとは独立のものであることが明らかになった。しかし、このような資源配分と生活感情の関係は、高学歴であってもその就業状況によって異なると予想される。今日、多くの高学歴女性が「子育てに専念」を理由に退職する。その結果、子どもの低年齢での受験など、母親の能力の発揮、達成の対象を子育てに求めるケースが多い。そのことを考えれば、高学歴であっても無職の場合には、子育てが個人としての能力の発揮、及び自己の存在意義を確認する対象となっていることが推察される。

このことは、母親の学歴・就業形態からみた子どもへの期待の調査でも次のように指摘されている。「子育て内容の水準上昇と自分らしく生きることが結びついて、よりよい子育ては、高学歴専業主婦のアイデンティティのあり方になっている」(山田 2000)。

母親役割が縮小し家事・子育てだけでは余剰資源が生じる状況の中で、その余剰資源を投入し母親自身の能力発揮の対象としての「子育て」に専念することは、多くの問題を孕んでいよう。本研究ではサンプル数の問題から、高学歴有職群と高学歴無職群の比較は行わなかった。しかし、同じく高学歴であっても有職群と無職群の生活空間の違いは大きい。今後、高学歴無職群の女性の人格発達についてさらに研究する必要がある。

文 献

- 朝日新聞 1998年11月25日 専業主婦のゆううつ
 朝日新聞 1998年11月26日 専業主婦のゆううつ反論特集
 東洋・柏木恵子編 1999 社会と家族の心理学 ミネルヴァ書房
 堀内和美 1933 中年期女性が報告する自我同一性の変化—専業主婦、看護婦、小・中学校教師の比較 教育心理学研究41巻
 Josselson, R.L., 1996 Revising Herself: The Story of Women's Identity from College to Midlife New York: Oxford University Press
 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究 5巻1号 72-83
 柏木恵子・永久ひさ子 1999 女性における子どもの価値—今、なぜ子を産むか— 教育心理学研究 47巻2号 50-59

成人期女性における資源配分と生活感情 (永久ひさ子・柏木恵子)

- 前川あさみ・無藤清子・野村法子・園田雅代 1996 複数役割を持つ成人期女性の葛藤と統合のプロセス 東京女子大学女性学研究所
- 目黒依子・矢澤澄子 2000 少子化時代のジェンダーと母親意識 新曜社
- 宮下一博・小林利宣 1981 青年期における疎外感の発達と適応の関係 教育心理学研究29巻 297-305
- 諸井克英 1984 高校生における孤独感と自己意識 心理学研究56巻 237-240
- 永久ひさ子 1995 専業主婦における子どもの位置と生活感情 母子研究16巻 50-57
- 永久ひさ子・柏木恵子 2000 母親の個人化と子どもの価値—女性の高学歴化・有職化の視点から— 家族心理学研究14巻 139-150
- 中釜洋子・園田雅代 1989 青年期後期から成人期にかけての女性の自我同一性発達に関する縦断的研究Ⅱ 日本教育心理学会第31回総会発表論文集 223
- NHK 放送文化研究所 2002 日本人の生活時間・2000 NHK 放送文化出版
- 落合良行 1985 青年期における孤独感を中心とした生活感情の関連構造 教育心理学研究33巻 70-75
- 岡本祐子 1996 育児期における女性のアイデンティティ様態とその要因に関する研究 日本家政学会誌47 849-860
- 岡本祐子 1997 中年期からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版
- 岡本祐子 1999 女性の生涯発達とアイデンティティ 北大路書房
- 大野久 1984 現代青年の充実感に関する一研究 教育心理学研究32巻 100-109
- 神原文子・高田洋子編著 2000 教育期の子育てと親子関係 ミネルヴァ書房
- 内田圭子 1990 青年の生活感情に関する一研究 教育心理学研究38巻 117-125
- 山田昌弘 2000 「よりよい子育て」に追い込まれる母親たち 目黒依子・矢澤澄子編「少子化時代のジェンダーと母親意識」新曜社
- 読売新聞 2001年2月16日 変わる家族像・結婚観